

夏目漱石

博士問題と

マードック先生と余



博士問題とマードック先生と余



## 上

余<sup>よ</sup>が博士に推薦されたという報知が新聞紙上で世間へ  
伝えられたとき、余を知る人のうちのある者は特に書を  
寄せて余の栄選を祝した。余が博士を辞退した手紙が同  
じく新聞紙上で発表されたときもまた余は故旧新知もし  
くは未知のあるものからわざわざ賛成同情の意義に富ん  
だ書状を幾通も受取<sup>うけと</sup>った。伊予<sup>いよ</sup>にいる一旧友は余が学位

を授与されたという通信を読んで賀状を書こうと思つて  
いたところに、辞退の報知を聞いて今度は辞退の方を目  
出度思でたくつたそうである。貰もらつても辞してもどっちにして  
も賀すべきことだというのがこの友の感想であるとかい  
つてきた。そうかと思つと悪戯いたずら好の社友は、余が辞退し  
たのを承知のうえで、ことさらに余を厭いやがらせるために、  
夏目文学博士殿と上書うわがきをした手紙を寄こした。この手紙  
の内容は御退院を祝すというだけなんだから一行で用が  
足りている。したがつて夏目文学博士殿と宛名あてなを書くほ  
うが本文よりも少し手数てすうが掛かつたわけである。



しかしすべてこれ等の手紙は受取るまえから予期していなかったと同時に、受取ってもそれほど意外とも感じなかつたものばかりである。たゞ旧師マードック先生から同じくこの事件について突然封書が届いた時だけはまったく驚ろかされた。

マードック先生とは二十年前に分れたぎり顔を合せたこともなければ信書の往復をしたこともない。まったくの疎遠で今日まで打ち過ぎたのである。けれどもその当時は毎週五、六時間必ず先生の教場へ出て英語や歴史の授業を受けたばかりでなく、時々は私宅まで押し懸<sup>か</sup>けて

いって話を聞いたぐらい親しかったのである。

先生はもと母国の大学でギリシア語の教授をしておられた。それがあつた事情のため断然英国を後にして单身日本へ来る気になられたので、余等らの教授を受けるころは、まだ日本化しない純然たるスコットランド語を使つて講義やら説明やら談話やらを見境みさかいなく遣やられた。それがため同級生はことごとく辟易へきえきの体ていで、たゞ烟けむに捲まかれるのを生徒の分と心得こころえていた。先生もそれで平氣のように見えた。おおかたどうせこんな下くだらないことを教えているんだから、生徒なんかに分わかつても分らなくつても



構わないという気だったのだろう。けれども先生の性質がいかにも淡泊で丁寧で、立派な英国風の紳士と極端なボヘミアニズムを合併したような特殊の人格を具そなえているのに敬服して教授上の苦情をいうものは一人ひとりもなかった。

先生の白ホワイト襯シャツ衣コートを着たところはめったに見ることができなかつた。たいていは鼠ねずみいろ色のフラネルに風呂敷ふろしきの切きれ端はしのような襟ネクタイ飾タイを結んで済すましておられた。しかもその風呂敷チヨッキに似た襟チヨッキ飾タイが時々胸から抜け出して風にひらくするのを見受けたことがあった。高等学校の教

授が黒いガウンを着だしたのはそのころからのことであるが、先生も当時は例の鼠色のフラネルの上へ縺しゆす子かなにかのガウンを法衣ころものように羽織はていられた。ガウンの袖口そでぐちには黄色い平打ひらうちの紐ひもが、ぐるりと縫い廻してあった。これは裝飾のためとも見られるし、または袖口を括くくる用意とも受取うけとれた。たゞし先生にはまったく両様の意義を失った紐にすぎなかった。先生が教場で興に乗じて自分の面白おもしろいと思う問題を講じだすと、ほとんどガウンも鼠の襯衣も忘れてしまう。果はてはわがいる所が教場であるとということさえ忘れるらしかった。こんな時には大股おおまたで教

壇を下りて余等の前へ髯ひげだらけの顔を持つてくる。もし余等の前に欠席者でもあつて、一脚の机が空あいていければ、必ずその上へ腰を掛ける。そうして例のガウンの袖口に着いている黄色い紐を引張ひっぱつて、一尺ほどの長さを拵たらえて置いて、それでぴしやりくと机の上を敲たいたものである。

当時余はほんの小供こどもであつたから、先生の学殖とか造ぞう詣けいとかを批判する力はまるでなかつた。第一先生の使う言葉からが余自身の英語とはすこぶる縁の遠いものであつた。それでも余は他の同級生よりも比較的熱心な英語

の研究者であつたから、分らないながらもでき得るかぎりの耳と頭を整理して先生の前へ出た。時には先生の家<sup>うち</sup>までも出掛<sup>で</sup>けた。先生の家は先生のフラネルの襯衣と先生の帽子——先生はくしゃく<sup>な</sup>になつた中折帽<sup>なかおれぼう</sup>に自分かつてに變な鉢卷<sup>はちまき</sup>を巻き付けて被<sup>かむ</sup>つていたことがあつた。——すべてこれ等先生の服装に調和するほどに、先生の生活は單純なものであるらしかつた。

## 中

そのころの余よは西洋の礼式というものをほとんど心こころ
 得えなかつたから、訪問時間などという觀念を少しも挾さしは
 さむ氣兼きがねなしに、時ならず先生を襲う不作法をあえてし
 て憚はッからなかつた。ある日朝早く行くと、先生はちよう
 ど朝食あさめしを認したゝめている最中であつた。家が狭いためか、
 または余を別室に導く手数てかずを省いたためか、先生は余を
 自分の食卓の前に坐すわらして、君はもう飯を食つたかと聞

かれた。先生はその時卵のフライを食っていた。なるほど西洋人というものはこんなものを朝食うのかと思つて、余はひたすら食事の進行を眺<sup>なが</sup>めていた。実は今考えるとその時まで卵のフライというものを味わったことがないような気がする。卵のフライという言葉もそれからずっと後に覚えたように思われる。

先生はやがて肉刀<sup>ナイフ</sup>と肉匙<sup>フォーク</sup>を途中で置いた。そうして椅子<sup>い</sup>を立ち上がって、書棚の中から黒い表紙の小形の本を出して、そのうちのある頁<sup>ページ</sup>を朗々と読みはじめた。しばらくすると、本を伏せてどうだと聞かれた。正直のと

ころ余には一言も解わからなかつたから、いつたいそれは英語ですかと聞いた。すると先生は天来の滑稽を不用意に感得したように憚はゞかりなく笑いだした。そうしてこれはギリシアの詩だと答えられた。英国の表エキस्पレッツシヨン現に、珍ちん紛漢ぶんかんのことを、それはギリシアさというのがある。ギリシアはかの地でもそれくらいむずかしいものにしてあるのだらう。高等学校生徒の余などに解るはずはむろんない。それをなぜ先生が読んで聞かせたのかというと、詳しい理由は今思い出せないが、なんでもギリシアの文学を推称したあげくのことではなかつたかと思う。とにか



く先生はそういう性質たちの人なのである。

先生の作った「日本におけるドン・ジュアンの孫」という長詩もたしか聞かされたように思う。けれどもそのうちのある行にアラス、アラック、という感投詞が二つ続いていたらと記憶するだけで、あとはまるで忘れてしまった。

ベインの論理学を読めと言って先生が貸してくれたこともあった。余はそれを通読するつもりで宅うちへ持って帰ったが、なにぶん課業その他が忙がしいのでだんく延びくくになって、いつまで立っても目的を果し得なか

った。ほど経て先生が、久しい前君ぜんに貸したベインの本は僕の先生の著作だから保存しておきたいから、もし読んでしまったなら返してくれと言われた。その本はだいぶたんねんに使用したものと見えて裏表とも表紙が千切ちぎれていた。それを借りたときにも返した時にも、先生は哲学のほうの素養もあるのかと考えて、小供心こどもごころに羨うらやましかつた。

あるときどんな英語の本を読んだら宜よかろうという余の問に応じて、先生はさっそく手近にある紙片に、十種ほどの書目を認しためて余に与えられた。余は時を移さず

そのうちのあるものを読んだ。即座に手に入らなかつたものは、機会を求めて得るたびにこれを読んだ。どうしても眼に触れなかつたものは、ロンドンへ行つたとき買って読んだ。先生の書いてくれた紙片が、余の袂たもとに落ちてから、約十年の後に余ははじめて先生の挙あげたすべてを読むことができたのである。先生はあの紙片にそれほどほどの重きを置いていなかったのだらう。すべてを読んだからまた十年も経たつた今日から見れば、それほど先生の紙片に重きを置いた余のほうでも可笑おかしい気がする。

外国から歸つた当時、先生の消息を人伝ひとづてに聞いて、先

生は今鹿児島の高専学校に相変わらず英語を教えていると  
いうことが分った。鹿児島から人が出てくるたびに余は  
マードックさんはどうしたと尋ねないことはなかった。  
けれども音信はその後二人の間にまったく絶えていたの  
である。たゞ余が先生について得た最後の報知は、先生  
がとう／＼学校を已めてしまつて、市外の高台に居をほく  
しつゝ、果樹の栽培に余念がないらしいということであ  
つた。先生は「日本における英国の隠者」というような  
高尚こうしょうな生活を送っているらしく思われた。博士問題に  
関して突然余の手元てもとに届いた一封の書簡は、実にこの隠

者が二十余年来の無音ぶいんを破る価ありと信じて、とくに余のためしたうに認めてくれたものとみえる。

## 下

手紙には日常の談話と異ならない程度の平易な英語で、真率まじめに余よの学位辞退を喜こぶむねが書いてあった。そのうちに、今回のことは君がモラル・バックボーンを有している証拠になるから目出度めでたいという句が見えた。モラル・バックボーンというなんでもない英語を翻訳する

と、徳義的脊髄せきずいという新奇でかつ趣のある字面じづらができる。余の行為がこの有用な新熟語に価するかどうかは、先生の見識に任せておくつもりである。（余自身はそれほど新らしい脊髄がなくても、不便宜なしに誰だれにでもできる所作しよささだと思うけれども）。

先生はまたグラッドストーンやカーライルやスペンサーの名を引用して、君のお仲間もだいぶあると言われた。これには恐縮した。余が博士を辞する時に、これ等前ら人の先例は、毫ごうも余が脳裏ひらに閃めかなかったからである。——余が決断を促がす動機の一部をも形づくらなかつ

たからである。もつとも先生がこれ等知名の人の名を挙あげたのは、辞任の必ずしも非礼でないという実証を余に紹介されたまでで、これ等知名の人を余に比較するためでなかったのはむろんである。

先生言う、——吾等われらが流俗以上に傑出しようと力つとめるのは、人として当然である。けれども吾等は社会に対する榮譽の貢献によつてのみ傑出すべきである。傑出を要求するの最上権利は、すべての時において、吾等の人物いかんと吾等の仕事いかによつてのみ決せらるべきである。



先生のこの主義を実行していることは、先生の日常生活を別にしても、その著作日本歴史において明かに窺うかがうことができる。自白すれば余はまだこの標準的述作スタンダードウォークを讀んでいないのである。それにもかゝわらず、先生が十年の歳月と、十年の精力と、同じく十年の忍耐を傾け尽して、ことごとくこれをこの一書の中に注ぎ込んだ過去の苦心談は、先生の愛弟子山県五十雄君から精しく聞いて知っている。先生は稿を起すに當って、ほとんどあらゆる国語で出版された日本に関するすべての記事を読破したということである。山県君は第一その語学の力に驚

ろいていた。オランダ語でもなんでも自由に読むと言つて呆れたあきような顔をして余に語った。述作の際非常に頭を使う結果として、しまいには天を仰あおいで昏倒多時こんとうに亘わたることがあるので、奥さんがたいへん心配したという話も聞いた。そればかりではない、先生は単にこの著作を完成するために、日本語と漢字の研究まで積み重ねたのである。山県君は先生の技倆ぎりょうを疑つて、むずかしい漢字を先生に書かしてみたら、旨うまくはないが、画だけは間違まちがなく立派りっぱに書いたと言つて感心していた。これ等の準備からなる先生の日本歴史は、ことごとく材料を第一の源

から拾い集めて大成したもので、儲もうからない保証がある  
と同時に、学者の良心に対して毫も疚やましからぬ徳義的  
な著作であるのはいうまでもない。

「余は人間に能あたうかぎりの公平と無私とを念じて、榮譽  
ある君の国の歴史を今になお述作しつゝある。したがっ  
て余の著書は一部人士の不満を招くかもしれない。けれ  
どもそれは已やむを得ない。ジョンモーレーの言ったとおり  
何人なんびとにもあれ誠実を妨ぐるものは、人類進歩の活力を妨  
ぐると一般であつて、その真正なる日本の進歩は余の心  
を深くかつ真面目まじめに動かす題目にほかならぬからであ

る。」

余は先生の人となりと先生の目的とを信じて、こゝに先生の手紙の一節を有ありの儘まに訳出した。先生は新刊第三卷の冒頭にある緒論をとくに思慮ある日本人に見てもらいたいと言われる。先生から同書の寄贈を受ける日それを一読して満足な批評を書き得るならば、そうして先生の著書を天下に紹介することができ得るならば余の幸である。先生の意は、学位を辞退した人間としての夏目なにがしに自分の著述を読んでもらって、同じく博士を辞退した人間としての夏目なにがしに、その著述を天下に

紹介してもらいたいところにあるのだらうと思うからである。

(明治四四・三・六一八)



日本文学電子図書館

---

「漱石全集 第8巻」

著 者：夏目漱石

制作者：宮澤一郎

出版社：角川書店

昭和42年7月30日 6版発行

---



日本文学電子図書館